生涯学習基盤経営研究 第 44 号 2019 年度

研究ノート

博物館学芸員の力量形成の過程に関する一考察

—1970 年代以降の学芸員の専門性の議論を中心に—

中川友理絵[†]

[†]東京大学大学院教育学研究科

今日，日本の博物館学芸員には，市民の学習支援の役割が求められ，専門性を高めていくことが重要になっている。本稿の目的は，学芸員の専門的な力量の形成過程について，学芸員の市民との関わりという観点からその在りようを検討し，市民の学習支援の特徴を明らかにすることである。1970 年代より，学芸員の専門性として研究者・技術者・教育者の 3 要素が示され，さらに，他者との日常的な関係の中で形成される汎用的な能力が重視されるようになり，学芸員が博物館内外の多様なアクターと関わりをもつことが求められている。学芸員の力量形成の過程について，学芸員間の連携，学芸員と市民との連携に関する論考を整理し，専門性の 3 要素を有機的に接合させることで，力量形成の過程を重層的に捉えることを試みた。学芸員が構成する多様な関係性によって，博物館での学習は思考に広がりを持つように図られ，その点でエデュケーター等の教育専門職とは差別化される。

キーワード：学芸員，力量形成，専門性

目 次

1 はじめに

1.1 研究の背景と目的
1.2 研究の方法

2 学芸員の専門性

2.1 専門性をめぐる背景
2.2 専門性の内実に関する議論
2.3 実践をとおした専門性の広がりという視点

3 学芸員の力量形成の過程

3.1 学芸員間の連携
3.2 学芸員と市民との連携
3.3 考察

4 おわりに

注

1 はじめに

1.1 研究の背景と目的

本稿の目的は，日本の博物館学芸員の専門的な力量の形成過程について，学芸員の市民との関わりという観点からその在りようを検討し，学芸員の市民への学習支援の特徴を明らかにすることである。

今日，生涯学習や文化の拠点として，博物館では多様な教育プログラムやボランティア活動がおこなわれている。それに伴い，2011 年に文化庁主催のミュージアム・エデュケーター研修が実施されたように，学習支援を担う学芸員や，エデュケーターやコミュニケーター等の博物館教育の専門職の存在が求められている。

また，博物館の現場では，非常勤学芸員の増加が懸念されている。その問題点として，安高啓明は，調査研究の継続性，人材育成，学芸員同士の信頼関係の構築が困難であることを挙げ，博物館と学芸員が文化の継続性に対して大きな役割を担っていることを主張している[1]。今日，不安定な立場にある非常勤のみならず，専任の学芸員にも共

通することであるが，各々の学芸員が専門性を高めていくことが極めて重要になっている。

日本の博物館学芸員は，博物館法第 4 条 3，4 項によって，博物館の専門的職員として博物館資料の収集，保管，展示及び調査研究その他これと関連する事業についての専門的事項をつかさどると規定されている。近年では，市民の博物館に求める学習内容が多様化・高度化し，それに対応するためのより高度な専門性が学芸員に必要とされている。文部科学省に設置された「これからの博物館の在り方に関する検討協力者会議」(以下では，検討協力者会議）の報告書『新しい時代の博物館制度の在り方について』（2007 年）では，学芸員に求められる専門性について，「資料及びその専門分野に必要な知識及び研究能力」「資料に関する収集・保管・展示等の実践技術」「高いコミュニケーション能力を有し教育活動等を展開できる能力」「一連の博物館活動を運営管理できる能力」の 4 点にまとめている[2]。報告書では，これらの能力を身に付ける方策として，大学の養成課程の見直しや現職学芸員の研修の体系化，博物館と大学とのネットワーク構築等が挙げられている。

学芸員養成の見直しが制度や研究，実践において進められていく中で，髙橋克は，博物館教育論の科目が博物館の機能としての教育の在り方を示すことにとどまっており，学芸員の心構えや教えるためのスキル等，教育者としての学芸員の在り方について明確に扱われていないことを指摘している[3]。また，社会教育研究の領域においても，学芸員の実態や教育活動の役割に関する研究がこれまで十分に行われていないことが指摘され，近年，新藤浩伸らや渡邊祐子がインタビュー調査をもとに，教育活動を担う学芸員の意識や専門性を実証的に検討する研究を行っている[4]。このように，学芸員の教育や学習支援の役割に関する研究が少しずつ蓄積される状況にあり，本稿が参照すべき点は多い。

一方で，現職学芸員の資質向上を図る，研修の開発や取り組みは数多く行われているものの[5]，研修の場に加えて，学芸員が日常的な場面で専門的な力量をどのように身に付けていくのか，という検討は進められていない状況にある。博物館には，ボランティアやサークル団体等の多くの市民が日常的に足を運んでおり，彼らの活動年数は学芸員の勤務年数より長くなることもある。先の報告書によれば，学芸員が教育活動を展開する際に，コミュニケーション能力として双方向的な関わりが重視されることから，学芸員の力量形成の過程に市民との関わりについても検討することは，一方向的な，教育する・されるという関係を架橋して，双方が地域や文化の継続性に向けた博物館活動を展開させていくものだと考えられる。

今日の社会教育研究では，職員が力量を形成していく際の，支援者と被支援者の相互作用という関係に注目が集まっている。高橋満らの研究では，看護・福祉職や子ども・若者支援職，社会教育職の対人支援者の専門性を，“彼・彼女たちの実践の場における相互作用のなかで形成されるもの”[6]として捉えており，孤立した個人ではなく，人びとの間の社会的な関係が分析の対象となる[7]。この観点は，実践の場の多様な関係を捉えようとする点で，一般的に言われる「実践をとおして力をつけていく」ことの実態を映すものとして理解することができる。本稿では，学芸員が専門性を身に付けていくことが，学芸員個人によるもののみならず，学芸員たちの実践の場における市民との関わりによって形成されるということの在りようを，その観点も含めて検討することを試みる。

1.2 研究の方法

本稿では，日本において博物館に関する学会や分科会が設置され[8]，博物館の研究が活発になってきた 1970 年代以降から今日に至る議論の蓄積に着目する。新藤らによれば，現在の博物館の住民や施設間連携の動向は，“新しい展開というよりも，学習や創造，集いという，社会教育施設の本来的な意味を深める地道な活動の蓄積にほかならない”[9]という。学芸員の専門性について，報告書で規定されている内容のみならず，館長や学芸員，資格課程を担う大学教員等によってどのような議論が展開されてきたのかに注目する。

研究の方法として，全日本博物館学会，日本ミュージアム・マネージメント学会，日本社会教育学会，日本生涯教育学会で刊行されている論文及び『博物館研究』『社会教育』『月刊社会教育』の雑誌記事を分析の素材として，学芸員の専門性や力量形成に関する論文・雑誌記事のレビューを通して検討する。この他にも博物館学に関する文献を参照して，学芸員の専門性に関する論文や記述を収集するよう努めた。

分析対象となる論文・雑誌記事は，国立情報学研究所 CiNii において，上記の刊行物のキーワー

ドに「学芸員」「エデュケーター」「博物館職員」「教育」「学習」[10]をそれぞれ入力して検索した中で，学芸員の役割や専門性，力量形成について記述のあるものを対象とする。

分析の手順としては，まず，学芸員等に関する論文・雑誌記事より，学芸員の役割や専門性，力量形成に関する記述を抜粋する。次に，学芸員の専門性をめぐる背景や専門性の内実に関する議論を整理して，学芸員の力量形成の在りようを検討するための視座を導出する。それをふまえて，学芸員の力量形成の過程を，他館の学芸員の存在に加えて，市民との関わりという観点から検討し，学芸員の市民への学習支援の特徴について考察を加える。

本稿では，学芸員が教育活動を担うことについて，「学習支援」という用語を用いる。その背景として，1990 年以降の生涯学習政策では，学習者の自主性を強調して生涯教育から生涯学習へと概念が移行することに伴い，社会教育専門職においても，「学習支援」という視点が求められていることが挙げられる[11]。ただし，既存の論文・雑誌記事で用いられる文脈に応じて「教育」「教育普及」という用語を用いることもある。

本稿の構成は，（1）研究の背景と目的，研究の方法，（2）学芸員の専門性の論考の整理，（3）学芸員の力量形成の過程についての検討，（4）本稿のまとめと課題である。

2 学芸員の専門性

本章では，学芸員の専門性の論考について，学芸員の専門性をめぐる政策的背景，専門性の内実に関する議論，実践をとおした専門性の広がりという視点，として整理する。

2.1 専門性をめぐる背景

1970 年代より学芸員の専門性について議論されはじめた背景には，1960～70 年代にかけて社会教育職員の専門性が問われたことが挙げられる。具体的には，1959 年の社会教育法改正による社会教育主事の市町村への必置による量的拡大や，1974 年に制度化された社会教育主事の数的不足を学校教員が補う派遣社会教育主事制度，職員の不当配転問題等を契機に，社会教育職員の専門性の確立が求められてきた[12]。このような議論の高まりに伴い，後述する学芸員の専門性の内実が論じられるようになる。

教育政策の上で，ターニングポイントとなるのが，1981 年の中央教育審議会（以下では，中教審）答申『生涯教育について』である。この答申によって，生涯教育を基本的な理念として教育政策全体が打ち立てられるようになり，臨時教育審議会の議論を経て，教育政策の生涯学習体系への移行が目指された。大学の学芸員養成課程では，1996 年の生涯学習審議会社会教育分科審議会による報告『社会教育主事，学芸員及び司書の養成，研修等の改善方策について』によって，大学での養成内容を見直し，社会の変化や学習ニーズの多様化等に対応する観点から，修得単位数の増加や，三資格の共通科目として「生涯学習概論」の新設等が示された[13]。情報化，国際化，高齢化等に伴う社会の進展や，博物館・図書館に求められる生涯学習推進拠点としての機能の充実に伴い，社会教育主事，学芸員及び司書の高度な専門性の養成がますます重要になるとされている[14]。

さらに，2008 年の中教審答申『新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について』の中で，“学芸員が現代的課題に対応し，国際的にも遜色のない高い専門性と実践力を備えた質の高い人材として育成されるよう”[15]，大学等における養成課程等の見直しが求められた。2009 年には「検討協力者会議」の第 2 次報告書『学芸員養成の充実方策について』において，学芸員資格取得のために習得すべき科目の拡大が示され，2012 年度より「博物館教育論」等の科目が新設されている[16]。

このように，学芸員養成課程の教育に関する科目の新設に伴い，博物館における教育や学習の特性が問われ，その度に，学芸員には教育や学習支援にかかわる高度な専門性が求められてきたことがうかがえる。

2.2 専門性の内実に関する議論

学芸員の専門性にはどのような知識・技術・能力が含まれるのか。それは，時代とともに，どのように展開されたのだろうか。学芸員の専門性に関する議論を概観する。

1970 年代では，社会教育職員論を基盤に，一部の博物館職員や学芸員によって，市民の学習を保障するものとして，専門性が論じられてきた。鶴田総一郎は，学芸員は研究者であること，十分に研究された「もの」を「ひと」に結び付ける教育者であること，熟練した収集保存技術者であるこ

とを述べている[17]。この 3 つの分類は倉田公裕によって同様に論じられ，資料の研究・保存科学・教育普及の 3 つの専門に分割されるべきであると主張している[18]。このような分類は，博物館の機能とされる調査・研究，収集・保存，展示・教育と重なり，学芸員が博物館内の様々な活動を担っていることの反映だといえる。

この専門性の議論の特徴として，倉田は，“資料の研究者つまり研究者だけでは片手落ちで，その研究された資料を活用し展示という形態を通じ，広義の教育を理論的に追及すると共に，その実践をする教育者であらねばならない”[19]と述べ，研究者かつ教育者であることが必要だとしている。その際，個人がこれらの分野についてすべて第一線の専門家であることは極めて困難であるとされ，学芸員が組織を構成していることが専門性の議論の前提になっている[20]。

なぜ専門性が求められるのかについて，鶴田は博物館を「生きた博物館」にするために学芸員の専門性が必要だとしている[21]。また，広瀬鎮は，博物館学芸員の養成は，市民の学習権保障やボランティアの形成と関連をもつと主張している[22]。鶴田と広瀬の論考が社会教育の雑誌記事・論文で語られていたことから推察されるように，社会教育職員論や学習権保障の議論をもとに，市民の学習に資するために学芸員の専門性について論じられてきたことがうかがえる。

1990 年代では，生涯学習の理念が広まり，博物館に多様な機能が求められ，学芸員には研究者・技術者・教育者を総合させた役割が求められる。中川志郎は，学芸員の役割について，“今，市民と共に歩み，市民からのフィードバックを消化しつつ活動を行い，市民自身が博物館活動にかかわる生涯学習時代に求められるのは，それら（研究者，技術者，教育者：引用者注）の総合であり，博物館自身のもつ運営方針であり，それを支える学芸員の意識ということになろう”[23]と述べている。

また，博物館友の会やボランティア等の市民活動を支援するための，資料に対する専門的な知識・技術や，市民にその知識を伝えて活動を促す博物館学の知識が求められるようになる。牛島薫は，博物館活動の基礎を調査研究として，市民に対する活動の信頼性を保証するのが学芸員の専門性であることを考えれば，研究機関に登録されていない博物館や，資料の収集・保存や調査研究を積極的に行わない科学館等においても，その分野の専門的な知識・技能は重要であるとしている[24]。また，青木豊は，“博物館学芸員に要求される高度な学識は，各学術分野の専門知識と博物館学知識の二者である。（中略）今日の社会情勢下に於かれた博物館を観た場合，博物館展示や教育諸活動がその重要さを増して居るところからも博物館経営の上でより必要となるのは，後者の博物館学知識なのである”[25]と述べている。このように，1990 年代以降においても，学芸員の専門性について，多少の変化を伴いながら，研究者・技術者・教育者の枠組みが引き継がれて論じられている。

2.3 実践をとおした専門性の広がりという視点

冒頭で述べた「検討協力者会議」の報告書では，学芸員の専門性について，専門知識と研究能力，実践技術，コミュニケーション能力，運営管理能力の 4 点を挙げている。それ以降，この報告書を学芸員の専門性の指針として，学芸員自らの職務に求められることとは何かを問う論考が，多様な館種の学芸員の実践をもとに展開されていく。

例えば，来館者に向けた活動を展開するための，技量や知識である。高田浩二は，動物園・水族館の学芸員の重要な役割として，学芸員や飼育技師が資料の情報を一方的に発信するだけではなく，利用者との交流を図ることをあげ，そのために，具象化，教材化，プログラム化する技量や知識を修得することが必要であるとしている[26]。

また，科学と社会の関わりを考えていく上での礎となる，科学的思考といった汎用的な能力が挙げられる。田代英俊は，科学系博物館の学芸員の専門性として，“資料や展示物そのものに関する知見やそこに内存する原理等の科学的知見を熟知するとともに，来館者の中に科学的に物事を考える能力そのものを育てるためのスキルも持たなければならない。そのためには，まずは，科学系博物館の学芸員自体が，科学的に物事を考える能力そのものを身につける必要がある”[27]と述べている。

さらに，学芸員がモノをとおして人と人とをつなぐ際の，媒介者としての専門性である。猿渡紀代子は，“モノを保存し継承していく博物館はまた，そのモノを通して人々をつなぐことができる。市民参加や他者との協働は，調査研究・展示・教育といったさまざまな局面で可能であり，その活動主体であると同時に媒介役となる学芸員の専門性は，そのときにこそ生かされ試されることにな

る”[28]と述べている。

一方，インタビュー調査をもとに，学習支援を担う学芸員の意識や専門性について，探索的に検討する動きもみられる。新藤らは，学芸員が教育普及の方法を獲得するプロセスや，教育普及の理念を形成していく具体的なエピソードやそれを支える土台について，KJ 法によって導出されたカテゴリ間の関係を考察している。その中で，学校との関係が重要視されており，この関係性も学芸員の思考に影響を与えるとしている[29]。

渡邊祐子は，実地調査を通じて導出した博物館の教育担当職員の役割について，来館者と交流して関係性を構築すること，教育プログラムや教材をつくり実践すること，博物館の社会文化的役割を明らかにすることにまとめている[30]。また，専門的力量の形成プロセスについて，聞き取りの内容をもとに，「基礎的能力の形成」「応用力の形成」「熟達した能力」の 3 つの段階に分類している[31]。

このように，1970 年代以降，市民の学習の場や権利を保障し，活動を支援し，多様かつ高度な学習内容に応えるために，学芸員が専門性を備え，高めていくことが求められてきた。学芸員の専門性は，矢島國雄も言及するように，研究者・技術者・教育者という 3 つの要素を併せ持つものとして引き継がれており，それに付随して，今日では経営管理者としての資質や汎用的な能力が求められている[32]。研究者・技術者・教育者という 3 つの要素が，博物館の機能とされる博物館内の活動を示すのに対し，科学的な思考や媒介者としての専門性等の汎用的な能力は，各々の学芸員の活動をもとに問われてきたように，実践をとおして形成されるものといえる。このことは，実証的な研究で明らかにされてきた，学習支援を担う学芸員の意識や専門性について，学校との連携や来館者との交流等，他者との関係が重視されていることからもうかがえる。

ここで，さらなる検討が求められるのは，上記のような学芸員の専門性を，どのように身に付けていくのかということである。日本では一人の学芸員が資料の収集や展示等を担うことが多く[33]，特に，地方に位置する小規模の博物館では，学芸員が継続的に組織を構成して専門性を高めていくことが困難になっている[34]。また，専門的な能力として，従来から重視されている研究者・技術者・教育者としての力量に加えて，媒介役等の汎用的な能力として，他者との日常的な関係の中で流動的に形成されるものが重視されるようになっている。そのため，学芸員の力量形成には，博物館内外の多様なアクターと関わりをもつことがより一層求められる。新藤らは，学芸員の教育普及の改善に与する要因として，自分自身の教育実践・同僚・学校・他館，という運営者側の立場の 4 点を挙げ，加えて，参加者の振る舞いにも注目する必要があることを主張している[35]。そこで，本稿ではこの二者の立場から，学芸員の力量形成の過程として，学芸員間の連携や，学芸員と市民との連携がどのように論じられてきたのかを見ていく。

3 学芸員の力量形成の過程

本章では，学芸員の専門性に関する力量形成の過程として，学芸員間の連携と，学芸員と市民との連携に関する論考を整理し，学芸員の市民への学習支援の特徴について考察する。

3.1 学芸員間の連携

ここでは，学芸員が他館の学芸員と関わる機会となる，研究や技術の専門的な資質向上を図る研修や研究会に関する論考を整理する。

学芸員の研修について，2008 年の博物館法改正により，国及び都道府県教育委員会が学芸員等の研修を行う努力義務規定が新設され，2011 年の文科省告示『博物館の設置及び運営上の望ましい基準』においても，博物館が職員を研修に参加させるように努めることが盛り込まれるようになる[36]。

北村美香は，西日本自然史博物館系ネットワークや，学芸員技術研修会等の現場の専門職の要望に応じた研修会への参加により，“実践的な技術や知識を得られ，専門分野を超えて意見交換をおこなう機会を得ることができた”[37]としている。このような地域や館種に応じた専門職員のネットワークは各地で構築され，報告されている。

例えば，北海道博物館協会では，自主研究グループとして 1977 年に学芸職員部会が発足し，研修会を行っている。2012 年より若手学芸員を対象にした実技研修を行い，“各館園や個人に蓄積された技術や工夫を学び合う場とし，基本的に部会員が講師や発表者となり，部会員同士で学び合う方法を取ることとした。これは単に若手だけが学ぶのでなく，中堅層の学び直しも意図している”[38]とされている。このような研修を行う部会について，大谷・栗原は，“学芸員達が繋がりをもって活動し，

成長し合えるような場を提供できるプラットフォーム”[39]になることを期待している。

また，日本動物園水族館協会では，全国の園館の職員が参加し，自園館で行った研究成果を報告する動物園技術者研究会（1954 年～），水族館技術者研究会（1957年～），海獣技術者研究会（1969年～）を開催している[40]。動物園・水族館職員の資質向上や技量の強化は，同協会の活動目的の一つに位置付けられているが，植田育男によれば，このような研究会は研究成果の発表の場だけではなく，所属を異にする全国の動物園や水族館の専門職員の情報交換の機会にもなっている[41]。また，自然史分野に関して，全国規模の研修や研究会が，学芸員数の少ない自然史系学芸員の人的ネットワークの構築に大きな役割を果たし，受講後も専門分野に関する情報交換や相談を日常的に行うことで，地方で孤立しがちな学芸員を支えている[42]。

このような研修・研究会は，学芸員が知識・技術を獲得するのみならず，学芸員の組織化，他館とのネットワーク構築の基盤となるものであり，特に少人数の学芸員で構成される小規模の，または地方に位置する博物館において貴重な機会となっている。前澤和之が，特色ある地域文化の継承の難しさを防ぐ手立ての一つが，“小規模館の活動と学芸員を中心とした人のネットワークである”[43]と述べるように，学芸員間のネットワークは地域文化の継承の担い手としての役割をも果たしうる。その一方で，角田拓朗は，研修を受講できない多くの学芸員が存在することを指摘し，受講への参加を保障していくことを課題としている[44]。

3.2 学芸員と市民との連携

ここでは，学芸員が市民と関わりを持つ機会となる博物館の市民活動や，市民とのつながりの形成に関する論考を整理する。

2000 年，日本博物館協会は報告書『「対話と連携」の博物館―理解への対話・行動への連携―市民とともに創る新時代博物館』を発表し，博物館内外との対話と連携についての活動原則を掲げている[45]。ここでは，博物館・学芸員と市民との対話と連携が重視されているが，この主張は 1980 年代より社会教育の雑誌記事等で論じられてきたものとも合致する。その論考に改めて注目する。

例えば加藤有次は，学芸員と利用者を同格として位置付け，“活動の場によっては利用者に学芸員が働きかけられる場合もある。したがって一方的な働きかけであってはならず，双方共に相関性がなければならない。その相関性が強くなればなるほど活動状況が上昇する”[46]と述べている。この相関的な関係について，各々の博物館活動をとおして次のように論じられている。

後藤和民は，千葉市立加曾利貝塚博物館の土器づくり同好会の活動をとおして，“学芸員によって蓄積された技術や知識が，博物館に展示公開されるとともに，新しい地域住民や次の世代の人びとの学習や研究の基盤として，広く活用されていくのである。すなわち，この学芸員の存在によってこそ地域博物館は地域のものとなり，地域住民のものとなる”[47]と述べ，学芸員を「機能者」として位置付けている[48]。

また，橋口・君塚は，豊島区立郷土資料館の展示や連続講座の活動をとおして，“地域に根ざそうとする博物館である限りは，地域が抱えている課題（＝関心）は何かを知るための努力が必要だろう。それも，学芸員だけで取り組むのではなく，地域の生活者（＝住民）とともに動くという視点が要求されている”[49]として，地域住民との関係を重視した活動を展開させていくことを，学芸員の重要な役割であるとしている[50]。

また，那須孝悌は，大阪市立自然史博物館友の会を事例に，“学芸員各自が，自己の専門分野での成果を基礎に普及教育活動を展開すれば，もっと深く知りたいと希望する市民が集まってくるのは当然の事であり，そのようにして集まった人々がサークルをつくって活動することは，市民による博物館利用を促進するだけでなく，当該学問分野の裾野を広げ，いずれは後継者育成につながって行く”[51]と述べている。

近年では，北村美香は，民俗系博物館の現場で求められる専門性として，“日常より地域との関係性をよりよく築いていくためのコミュニケーション能力”と“近隣の博物館や大学，さまざまな分野で活動している市民団体などの人材に効率よく，効果的にアクセスするためのネットワークを構築するためのマネジメント力”[52]をあげている。北村によれば，民俗系博物館は，“地域の日常文化を対象にしており，地域のことは地域の方に聞くことで専門職員の学びになり，博物館としての調査研究にもなる。また，地域の方の記憶や経験と博物館の収蔵資料を合わせて教育普及事業へと発展することもできる”[53]として，市民や市民団体と

のつながりを形成していくことを重点的な課題としている[54]。

また，佐々木秀彦は，博物館の予算や人材の不足等の厳しい現実を突破するために連携が必要であり，“対話を重ねて信頼感が生まれる。人と人，人とミュージアム，ミュージアムと地域。それぞれに信頼の絆が生まれる。その絆づくりを進めていくのが，これからの学芸員に期待される役割ではないだろうか”[55]と述べている。

このように，1980 年代では，学芸員は地域住民との関係を重視しながら，自らの専門分野を基礎に，市民とともに活動ができるよう「機能者」としての役割が求められ，近年では，「コミュニケーション」や「マネジメント」，「絆づくり」という言葉で，学芸員に求められる専門性や役割が表されている。上記の論考では，専門性をどのように身に付けていくのかについて詳述されていない。しかしながら，これらの論考は，各々の学芸員の長年の経験により得られた知見であり，学芸員と市民との相関的な関係を不可欠なものとして，各々の活動が論じられている。これらの論考を学芸員の実践に対する省察と捉えて，学芸員と市民との連携についても，力量形成の過程の一部として位置付くものと考えられる。

3.3 考察

以上より，学芸員が専門的な力量を形成していく過程について，個人の資質向上を目指した研修等をとおして他の学芸員や博物館等とネットワークを構築すること，学芸員と市民との相関的な関係のもとに活動を展開し，学芸員自身が多様な経験を蓄積させていくこと，としてこれまでの論考を整理してきた。学芸員の力量形成の過程に，学芸員間の連携および学芸員と市民との連携の双方を位置付けることから，学芸員の市民への学習支援の特徴を次のように見出すことができる。

まず，力量形成の過程の多角的な検討によって，実践をとおした専門性の広がりという視点を示し，研究者・技術者・教育者という 3 つの専門性の要素を有機的に接合させていくことである。渡邊は学芸員の力量形成の過程を，初心者から熟達者という発達的な時間軸に沿って分類しているが，本稿では，多様な人びととの関わりをとおして，その過程を重層的に捉えようとするものである。それをふまえて，学芸員は，エデュケーターのような教育専門職とどのように差別化されるのか。小島道裕は，次のように論じている。

> もし博物館における教育が，展示という博物館に不可欠の行為とは別の所にあるのなら，それはエデュケーターという教育の専門家に任せておけばよい，とすることも可能かもしれない。しかし，（中略）実は学芸員がそこに籠めた意味を単純化し増幅してしまい，本来多様な可能性を持つはずの展示を，「正しいことを学ばせる」という一面的な学習の対象にしてしまう危険性が高い。そこに欠かせないのが「研究」という要素ではないだろうか。（中略）研究と教育とは本来一体のものであって，研究，すなわち「これはなんだろう」と考えることが展示であり，教育であると言える[56]。

このように，小島は学芸員の教育活動では「研究」をその前提として，博物館で学んだことが広がりを持つように図ることを主張している。小島が“「わかりやすく伝える」ということほど危険なことはなく，博物館はそのような思考停止の場ではない”[57]と述べるように，博物館での学習には，学芸員による多様な関係性の構築が重要な役割を担っているといえる。

4 おわりに

本稿では，1970 年代以降の博物館学芸員の専門性の論考を整理し，学芸員の専門性に関する力量形成の過程を，学芸員間の連携，学芸員と市民との連携という観点から検討し，学芸員の市民への学習支援の特徴について考察した。そこで明らかになったのは，以下の諸点である。

まず，学芸員の専門性について，1970 年代より研究者，技術者，教育者という 3 つの要素が提示され，時代や社会状況に応じて多少の変化を伴いながらも，その枠組みが今日に引き継がれて論じられていることを確認した。それに加えて，汎用的な能力など，実践をとおした他者との日常的な関係の中で流動的に形成されている能力が重視されるようになっていることから，今日，学芸員には博物館内外の多様なアクターと関わりをもつことが求められることを指摘し，力量形成の過程において博物館の運営者側・参加者側双方に注目する必要があることを述べた。

上記をふまえて，学芸員の専門的な力量の形成過程として，学芸員間の連携，学芸員と市民との連携に関する論考を検討した。具体的には，学芸員が個人の資質向上を目的に研修に参加することで，他の学芸員や博物館とのネットワークを構築すること，学芸員は市民とともに相関的な関係を構築して活動を展開させ，その経験を蓄積させてきたことを整理した。これらの営みは，実践をとおした専門性の広がりという視点を示し，研究者・技術者・教育者という 3 つの要素を有機的に接合させて，力量形成の過程を重層的に捉えようとするものである。その結果，学芸員による多様な関係性の構築によって，博物館での学習は思考に広がりを持つように図られ，その点で，エデュケーター等の教育専門職とは差別化される。

最後に，今後の研究課題を 2 つ述べる。本稿では，既存の論文・雑誌記事をベースに，学芸員の力量形成の過程について検討してきた。学芸員に関する議論は，専門性とは何かを明らかにする研究が蓄積される状況にあり，今後は，専門的な力量をどのように身に付けていくのかという「過程」に関する検討を，実践を意味づけながら深めていく必要がある。

また，本稿では学芸員による市民の学習支援が主題となり，博物館と学校教育との連携や，エデュケーター等の博物館教育の専門職に関する特性については，十分に取り上げることができなかったことに課題が残る。今後は，教育専門職の役割についての論考を整理し，博物館における学習支援の在り方について検討を深めていきたい。

注

1 安高啓明“非常勤学芸員に関する諸問題”『博物館研究』vol. 44, no. 11, 2009, p. 4–5.

2 これからの博物館の在り方に関する検討協力者会議“新しい時代の博物館制度の在り方について”入手先 URI: http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shougai/014/toushin/07061901.pdf（アクセス日：2019-10-17）

3 髙橋克“学芸員養成課程における博物館教育論の現状と課題：教育者としての博物館学芸員成の視点から”『國學院雑誌』vol. 118, no. 11, 2017, p. 43.

4 新藤浩伸，清水大地，清水翔“学芸員の教育に対する意識の形成”『東京大学大学院教育学研究科紀要』vol. 54, 2014, p. 161–178, 渡邊祐子“博物館職員の専門性と力量形成”〈高橋満，槇石多希子編著『対人支援職者の専門性と学びの空間：看護・福祉・教育職の実践コミュニティ』創風社, 2015〉p. 245–259.

5 例えば，緒方泉“学芸員の学習ニーズに応えた研修プログラムの開発と効果評価”『博物館学雑誌』vol. 40, no. 2, 2015, p. 155–166, 大木由以“学芸員の専門性を高める支援のあり方に関する考察”『生涯学習・社会教育研究ジャーナル』vol. 9, 2015, p. 49–72, 庄中（原田）雅子，坂井知志“学芸員向け研修の必要性”『博物館研究』vol. 52, no. 2, 2017, p. 19–22 など。

6 高橋満, 槇石多希子“対人支援職者の力量形成”〈高橋満・槇石多希子, *op. cit.*〉p. 12.

7 *Ibid*. p. 15.

8 1973 年に全日本博物館学会が設立，1974 年に社会教育推進全国協議会の全国集会で博物館分科会が設置された。

9 新藤浩伸，清水大地，清水翔“日本のミュージアム・エデュケーション”〈中小路久美代・新藤浩伸・山本恭裕・岡田猛編著『触発するミュージアム：文化的公共空間の新たな可能性を求めて』あいり出版, 2016〉p. 90.

10 日本社会教育学会，日本生涯教育学会の刊行物及び『社会教育』『月刊社会教育』を検索する際には，「博物館／ミュージアム」を各々のキーワードに追加した。

11 高橋満，槇石多希子, *op. cit.*, p. 11.

12 倉持伸江“社会教育職員の専門性と養成をめぐる検討：1960～70 年代の議論の整理”『社会教育職員研究』vol. 20, 2013, p. 63–72 を参照。

13 長谷川裕恭“社会教育主事，学芸員及び司書の養成・研修の改善措置等について”『社会教育』vol. 51, no.10, 1996, p. 42.

14 *Ibid*. p. 45.

15 文部科学省中央教育審議会答申“新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について～知の循環型社会の構築を目指して～”入手先 URI: http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2008/12/18/080219_01.pdf（アクセス日：2019-10-17）

16 これからの博物館の在り方に関する検討協力者会議“学芸員養成の充実方策について”入手先 URI: http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2009/02/18/1246189_2_1.pdf（アクセス日：2019-10-17）

17 鶴田総一郎“博物館学芸員の専門性について”『月刊社会教育』vol. 15, no. 11, 1971, p. 13–14.

[18] 倉田公裕“学芸員における学芸とは何か―その専門性をめぐって”『博物館研究』vol. 10, no. 5, 1975, p. 9.
[19] *Ibid*. p. 10.
[20] 鶴田総一郎“専門的職務は何か―博物館学芸員”『日本の社会教育』vol. 18, 1974, p. 227.
[21] 鶴田総一郎, *op. cit.*, 1971, p. 12.
[22] 広瀬鎮“学芸員の養成と研修―学芸員養成にみられる博物館の現代化”『日本の社会教育』vol. 23, 1979, p. 106.
[23] 中川志郎“学芸員の今までとこれから”『社会教育』vol. 51, no. 10, 1996, p. 25.
[24] 牛島薫“学芸員の調査研究活動の位置付けと業務管理”『日本ミュージアム・マネージメント学会研究紀要』vol. 9, 2005, p. 73.
[25] 青木豊“博物館法改正に伴う資質向上を目的とする学芸員養成に関する考察”『博物館学雑誌』vol. 33, no. 1, 2007, p. 63.
[26] 高田浩二“新しい学芸員養成課程の運用への期待と課題―動物園，水族館において求められる学芸員像”『博物館研究』vol. 45, no. 12, 2010, p. 20.
[27] 田代英俊“科学館を含む科学系博物館から見た新しい学芸員養成課程に対する大学への要望”『博物館研究』vol. 45, no. 12, 2010, p. 16.
[28] 猿渡紀代子“新たな学芸員像へ向かって”『博物館研究』vol. 45, no. 12, 2010, p. 14.
[29] 新藤浩伸，清水大地，清水翔, *op. cit.*, 2014, p. 177.
[30] 渡邊祐子, *op. cit.*, p. 250–251.
[31] *Ibid*. p. 252–257.
[32] 矢島國雄“博物館専門職員養成の諸問題”『博物館研究』vol. 51, no. 2, 2016, p. 7.
[33] 鈴木章生“学芸員の専門性と学芸員養成課程の役割”『目白大学高等教育研究』vol. 17, 2011, p. 48.
[34] 土屋周三“博物館を支える地方博物館学芸員”『博物館研究』vol. 39, no. 11, 2004, p. 2–4.
[35] 新藤浩伸・清水大地・清水翔, *op. cit.*, 2014, p. 166–170.
[36] 文部科学省“博物館の設置及び運営上の望ましい基準”入手先 URI: http://www.mext.go.jp/a_menu/01_l/08052911/1282457.htm（アクセス日：2019-10-17）
[37] 北村美香“民俗系博物館専門職員に求められる専門性について”『博物館研究』vol. 51, no. 12, 2016, p. 17.
[38] 大谷茂之，栗原憲一“北海道博物館協会学芸職員部会によるスキルアッププログラム”『博物館研究』vol. 53, no. 10, 2018, p. 10.
[39] *Ibid*. p. 13.
[40] 植田育男“日本動物園水族館協会による加盟園館職員向けスキルアッププログラム”『博物館研究』vol. 53, no. 10, 2018, p. 6.
[41] *Ibid*. p. 6–7.
[42] 鈴木まほろ，渡辺修二，望月貴史，堀内慈恵，馬谷原武之，金杉隆雄“自然史標本の管理全般に関する専門研修について”『博物館研究』vol. 53, no. 10, 2018, p. 21.
[43] 前澤和之“館林市立資料館と学芸員たち”『博物館研究』vol. 45, no. 9, 2010, p. 15.
[44] 角田拓朗“歴史民俗系博物館における専門職員の養成”『博物館研究』vol. 51, no. 12, 2016, p. 14.
[45] 佐々木秀彦“学校・地域・家庭との連携に果たす学芸員の役割―連携を進めるための拠りどころ”『社会教育』vol. 67, no. 9, 2012, p. 19–20.
[46] 加藤有次“市民の学習と博物館―学習の援助と連携のすすめ”『社会教育』vol. 39, no. 5, 1984, p. 6.
[47] 後藤和民“地域に生きる学芸員―千葉市加曾利貝塚における「土器づくり」を中心にして”『月刊社会教育』vol. 27, no. 9, 1983, p. 19–20.
[48] *Ibid*. p. 19.
[49] 橋口定志，君塚仁彦“「地域博物館」学芸員のめざすもの―豊島区立郷土資料館の活動を通して”『月刊社会教育』vol. 31, no. 10, 1987, p. 45.
[50] *Ibid*. p. 47.
[51] 那須孝悌“学芸員の地位向上と処遇改善”『博物館研究』vol. 34, no. 10, 1999, p. 5.
[52] 北村美香, *op. cit.*, p. 16.
[53] *loc. cit.*
[54] *Ibid*. p. 17.
[55] 佐々木秀彦, *op. cit.*, p. 20.
[56] 小島道裕“博物館における教育の意味”『社会教育』vol. 65, no. 8, 2010, p. 9.
[57] *loc. cit.*

Consideration of the Competence Formation Process of Museum Curators: Focusing on the Study of Curators' Professionality since the 1970s

Yurie NAKAGAWA†

†Graduate School of Education, the University of Tokyo

In this paper, I examine the process of professional competence formation of curators from the viewpoint of the relationship between curators and citizens and clarify the characteristics of curators' support for citizens' learning. Since the 1970s, curators' professionality has comprised three elements: researchers, engineers, and educators. In recent years, curators are valued for their ability to form everyday relationships with others, such as general abilities, and they are required to engage with a variety of actors inside and outside the museum. With regard to competence formation process of curators, I organized the discussions on the cooperation among curators and between curators and citizens and tried to understand the process of competence formation in multiple layers by organically joining the three elements of professionality. The diverse relationships of curators make learning in the museum more expansive and promote thinking, which differentiates it from educators.

Keywords: Curator, Competence Formation, Professionality